

ファンデレイジング最前線……

VOL. 3

公益財団法人「京都地域創造基金を訪ねて」

今年の元旦に「京都府民だより」のトップ誌面を飾ったのは、京都府山田知事と対談する着物姿の深尾さんの姿でした。長年、きょうとNPOセンターの常務理事・事務局長として活躍されてきた京都地域創造基



公益財団法人京都地域創造基金理事長 深尾 昌峰さん

金理事長の深尾昌峰さんは「地域に暮らす一人ひとりが京都の未来を創（つく）る大きな力」になるとして、社会全体でNPOの活動を応援する京都発の先駆的な取り組みを紹介されてきました。「京都地域創造基金は、まだできての財団で半年の実績しかありません。日本で初めての市民出資型の公益財団法人で、300人以上の寄付によって設立されました」

実はその設立の背景にはいくつもの「くやしい想い」があったからだと言語る。「とある研究者は『日本にNPOはない。行政から金をもらっているようではNPOとは言えない』という。ただ多くのNPOは歯をくいしばってがんばり、新たな公共の担い手といわれたりしますが、気がつけばそういったものを支える基盤がないことは明らかでした」きょうとNPOセンターのほかにも日本で最初のNPO法人放送局「京都三条ラジオカフェ」の設立者に一人でもある深尾さんは、電波免許を交付してくれなかった「国の壁」や融資を実行してくれなかった「民の壁」など愕然とするやり場のない「悔しさ」をあげわってきた。資金があれば経営資源（ヒト、モノ、場所など）の問題の多くは解決していくため、社会的な流れによってお金の流れを創り出さねばと感じていたそうだ。

京都は昔から町衆等、住民同士の結びつきの強い土地柄。NPO数では全国の16%が集中する東京がどうしても多くなるが、人口10万人あたりのNPO数では全国2位の37・6団体を数えている。「NPO数が多いのは逆に一種の不幸でそれだけ社会的な課題が多いともいえるのかもしれない。が、京都は「民度」が高いと感じます。一種の反骨精神です。きょうとNPOセンターの名刺は各自それぞれが色を選んでいて、僕の名刺はすこしくすんだ色をしているんですが、「京紫」という伝統色で、江戸紫に対しての色です。そういう進取の気風をもった人、そういう取り組みが多い京都。民衆は自分たちの取り組みで自分たちの生活を守ってきたのだと思います。また、「大学のまち」であることから、学生を「学生さん」と親しみを込めて呼ぶように、若い人たちを包容していく町で

社会を築ける
ある意味で
自己責任とNPOが
強いの。いま
うかがうか。そういうことも
さす
下には自治といふものについて考
させられるものがある。
方に出資していただいた。そ
ファンデレイジングは改め